初瀬川タイキ

車を停める。大きく息を吸う。二、三秒息を止めて、ゆっくり息を吐く。深呼吸、深呼吸。

よし。誰も見ていない。仙台は広瀬川の上流は今日も閑散としている。僕は革手袋をはめなおして、自動車（ルノー）の、後部座席のドアを開ける。そして、大切な、尊く、最愛のものを包んでいる毛布をひっぺがす。僕は、その光景に思わずニンマリとしてしまった。

仲良く並ぶ男女のつがいの亡骸、遺体、屍、骸。

「おやすみ、これで二人ともずっと一緒だね」

そう、僕は人を殺した。それも複数人。だが、後悔はしていない。だって、これは善行なのだから。

遺体の一人は僕の姉さん、いわゆる華族令嬢。もう一人は我が家のお手伝い兼運転手の青年。まとめて家の裏にある小川に背後から突き飛ばして、一生懸命に頭を水に沈めてあげた。二人とも酔っていたようで、そんなに殺すのは難しくなかった。はじめはジタバタ、中頃ピクピク、最後はビクビク、ピタッ。戸惑いはあったが、これも二人のためだ、姉さんの願望を叶えるためだと言い聞かせて、成し遂げた。

何を隠そう、この二人は生前、愛し合っていた。でもそれは身分違いの恋で、歓迎されざる恋だった。この世でダメなら、あの世で。美しい情愛の一つの形だ。勝手ながら僕の手で、背中を押してあげた。二人を結んであげたのだ。

水分を含んで冷たく、だらんと横たえた遺体はずっしりと重かったが、なんてことはない。これは愛の重さなのだから。車から川までの距離はそれなりに離れていたが、一歩一歩、自身の行為と心中の尊さを痛感できる至福のひとときであり、それが僕は嬉しかった。

僕は二人の亡骸を川へと転がす。無論、そっと、優しく。愛が、否。愛達が川の流れにのっていく。あぁ、なんと美しいのだろうか。僕は達成感でいっぱいだった。世間を騒がせた千葉心中は未遂に終わったが、僕はやり遂げ

た。二人の心中を手伝ってあげたのだ。姉さん、僕は姉さんのキューピッドだ。

きっとしばらく新聞は、華族令嬢と青年の悲恋の話題で持ちきりになる。きっといい見出しがつくだろう。なんだろう。そうだ。そう、仙台心中だ。これは昭和という新時代にふさわしい事件だ。

一仕事終えた僕は家に帰る前に、河原で火を起こした。僕は革手袋や毛布を火にくべて燃やした。それらははじめ、なかなか燃焼しなかったが、徐々に、見事に、綺麗に燃えていく。僕はぼおっと燃え盛る炎を眺めながら、あともう一仕事終えれば、全ては僕の思い通り、そう感じていた。そして、これらの計画が警察にバレることさえなく、やり過ごすことができれば全て完璧だ。

結論から話すと、当初警察にこの崇高な行動がバレることはなかった。はじめは他殺の可能性も警察は考慮しており、特にある一人の刑事は僕を強く疑っていたが、僕にはアリバイがあった。いや、正確にはそれを作っていた。

僕はあの夜、現場から遠いレストランを予約しており、そこで夜遅い時間まで食事をしていたことになっている。しかも、ウェイターは僕がたしかにいたことを証言している。しかし、そいつは僕に非常に似た存在であって僕そのものではない。彼は僕の双子の兄弟なのだ。

僕はもともと双子に生まれたことを好んでいなかった。なぜなら、双子ってのは不幸の前触れだとか、不吉だとか忌子だとか言われるからだ。そして、片方の存在はあらゆる手段で、家から排除される。そう、《カゾク》ではない存在にされるのだ。そして、明治の終わりになってもそんな怪しい因習を信じていた父は若き頃、一方の出生届けを出さないという手段をとった。

だから、戸籍上、我が家、もとい矢森家の男子は、矢森明次ただ一人。しかし、実際にはもう一人、矢森捨吉という存在が我が家には住まうのだ。しかし、後者の存在は生かさず、殺さず、徹底的に無視され続けた。科学的根拠なき因習が、この歪な状況を作り出してしまったのである。

また、これは本で知ったことだが、ヤモリは必ず、絶対に双子を産むという。姉妹だろうが、兄弟だろうが必ず。自身の家の名前も踏まえると、僕はきっとヤモリか何かの生まれ変わりなのだろうか。僕は自分の置かれた境遇が心底気持ち悪かった。

しかし、今回はこの特殊な生まれを僕は逆手に取った。僕のアリバイ工作に使ったのだ。警察もまさか同じ面の奴が二人いるとは思わなかったようで、取り調べは僕一人が受けて完結できた。もちろん証言に矛盾など出ないように、彼の当日の動きは、レストランから帰ってきたばかりの彼を拷問にかけ、全て聞き出していたので証言に矛盾も出ない。最後まで僕を疑う刑事さんはいたが、完璧なアリバイがある以上、僕は起訴されようがなかった。

そして、僕は警察からの追及を振り切れたことを確信した後、兄弟すらも手にかけ、戸籍と実態が一致するに至った。彼にとっては気の毒な話であるが、尊い心中のためならば仕方がない。彼の遺体は身元が割れないようにバラ……もとい、処理をして山に埋めた。あそこは人っ子一人すれ違ったことのない静かな山だ。これまた随分奥地まで運んだので、発見されるにしても少し時間がかかるだろうし、時間がかかっても、身元が割れることはほぼないだろう。

とにかく、これで概ね満足のいく結果となり、やりたいことは大方完遂できた。しかし、僕には二つ納得がいかないことがあった。

まず一つは、父を手にかけることができなかったこと。本来、父も僕の手で殺してやりたかったところだが、仏国（フランス）へ諸用で出かけていた彼は姉さんの死を知って、衝撃のあまり元からおかしくしていた心臓を、とうとう完全におかしくしてしまい、そのまま還らぬ人となった。死んでくれたこと自体にはせいせいしているが、あまり面白くはない。

そして二つ目。こちらの方が、僕にとって大変納得のいかないことだ。それは、

「今日もない……！　ない……！　ない……！」

一向に地元新聞社や出版社が、僕の知る最高の悲恋、仙台心中を取り上げようとしないことだ。たしかに、姉さんと運転手が亡くなったことそのものは、小さな記事としては載った。だが、それっきりこの一件は風化してしまった。むしろ、最近掲載された、身元不明の遺体が山中から発見されたという事件の方が大きくとりあげられたぐらいだ。まぁ、僕にとっては身元はわかっているのだけれど